古代人の心

――主として神武東征伝説より――

小出真治子

成立するものであり、「虚構」というのは、その意味から、当然制限を受けるものである。

私は、「古事記」が、現代語に直され、現代の文学作品として出版されたなら、恐らく何の価値も認められない詰まらないものとして、葬られると思う。「古事記」の中に書かれていることは、私達と何世紀も離れた古典としてこそ、批判や共鳴を呼ぶものなのである。極言すれば、私達の批判や共鳴は、この作品を、正しく捕えたものではないということである。

古代人にとって、「古事記」というのは、どういう意味を持っていたのか、私達には、わからないが、私達との価値観の相違は、認めねばならない。彼等が表現したものが、当時の「真実」であればある程、私達がそれを理解するのは難しい。そして、その「真実」というのが、歴史的なものではなく、心の「真実」であれば、なお

一

もし、「古事記」を、単なる文学として、その中に書かれている歴史的なものを、一切無視して読んだ場合に、私達はこれを素晴しい作品だと、云えるであろうか。

例えば、神武東征の所に、彼が「岡田宮」に一年、「多祁理宮」に七年、「高島宮」に八年いたという記述がある。歴史上の真偽は別にしても、私達には奇異に感じられる。又、彼が百三十七歳で死んだというのも、同様である。

確かに、文学に虚構は、必要である。しかし、それは「実」があるからこそ、「虚」があるのであって、決して「虚」があるからこそ、「実」があるのではない。つまり、文学は、実生活の上にこそ

さらである。何故なら、それは客観的に立証出来ないものだからである。

その上、現代人である読者の感想も又、「真実」なのである。

「真実」と「真実」のぶつかり合いは、永久に続いて行くのであり、そこに勝敗のつくことはない。だから、古代人と現代人の認識の相違は、現代人が全面的に負わねばならぬ課題であり、その現代人も何世紀か後には、古代人として理解してもらわねばならない宿命なのである。

私達は、どうしても、古代人の「真実」より、現代人の「真実」を重んじるが、共通な部分を接点として、少しでも彼等を、理解しなくては、古典は理解出来ないと思う。

次に「古事記」の神武東征の所で、素直に読み過ごせない部分を、挙げてみよう。

二

爾に大伴連等の祖、道臣命、久米直等の祖、大久米命の二人、兄宇迦斯を召して、罵詈りて云ひけらく、「伊賀作り仕へ奉れる大殿の内には、意礼先づ入りて、其の仕へ奉らむとする状を明し白せ。」といひて、即ち横刀の手上を握り、矛由気矢刺して、追ひ入るる時、乃ち己が作りし押に打たえて死にき。爾に即ち控き出して斬り散りき。故、其地を宇陀の血原と謂ふ。然して其の弟宇迦斯が献りし大饗をば、悉に其の御軍に賜ひき。

ここを読んで、私がまず初めに感じたのは、弟宇迦斯の残虐性である。作者は兄宇迦斯を謀反人とし、弟宇迦斯を忠義者として描いている様であるが、私はどうしてもそういう風には、取ることが出来なかった。

例え、自分の兄の方が悪いことはわかっていても、目の前で死体を切り裂かれ、「血原」と云われる程血が流れているのを見て、その殺害者の一行を饗応出来るだろうか。弟宇迦斯が、心から喜んで饗応していることが、前の文章から感じられる。

古代人は、概念としての「虚構」は、殆んど持っていなかったと思う。だから、彼等の文学は、実際に近いものだと云うことが出来よう。それだけに、善悪の区別は、実にはっきりしていて、読者に考える余裕を与えない程である。古代人なら、多分、兄宇迦斯を悪人とし、弟宇迦斯を善人としただろう。

だが、現代人には、その様な区別は通じないのである。私達は、兄よりも寧ろ弟に恐ろしさを感じる。

私には弟宇迦斯というのは、神武東征に出て来た人物の中で、最も嫌いな人物であった。もし、彼の行為を忠義として、彼等が認め

ていたのなら、私は古代というのは、「虚偽」であると思う。彼の何処にも人間らしさは感じられないし、これを文学としてみても、文学には入れられない。

何故なら、文学の根底にあるのは、人間愛である筈だ。ここまで人間の心を、追い込むのは、罪悪である。

唯、注意しなければならないのは、残虐ということである。私は先に、弟宇迦斯は残虐だと書いたが、これは、極めて現代的な考えである。

結局、「血」というものの認識の相違である。私達現代人にとって、「血」というのは、遠い存在であり、不気味なものである。ところが、古代人にとっては、身近かなものであり、勝利の象徴だったのかも知れない。彼等の感想の中には、「残虐」という言葉は、なかっただろう。彼等にとって、戦闘は、日常的なものであり、しかも、それは一対一の接近戦であった。私達の様に、戦いを知らずに、又知っていたとしても、遠い所で戦う近代戦の経験者には、わからない残酷さを、彼等は内に秘めていたと思う。

敵の顔を、目の先に見て、その首を取るというのが、古代の戦闘である。自分が握っていた刀で、相手を傷つけ、苦しむのを見ながら、さらに深手を負わせる。彼等にとって、「血」というのは、恐ろしいものでも、何でもなかった。戦場に流れている「血」は、自分の命を、賭けて得られた代償なのである。

彼等には、戦争を正当化する理由が、私達よりずっと多かっただろう。

私は、古代人が弟宇迦斯の様な人物を、一種の英雄の様にしていたであろうことは、推測出来る。しかし、どう思っても私の心に、彼を英雄として住まわせることは出来ない。理性では割り切れても、感情が厳しく拒絶するのである。

三

其地より幸行でまして、忍坂の大室に到りたまひし時、尾ある土雲八十建、其の室に在りて待ち伊那流。故爾に天つ神の御子の命以ちて、饗を八十建に賜ひき。是に八十建に宛てて、八十膳夫を設けて、人毎に刀佩けて、其の膳夫等に誨へて曰ひけらく、歌を聞かば、一時に斬れ。」といひき。……

如此歌ひて、刀を抜きて、一時に打ち殺しき。

ここでは、神武軍に抗しようとした土雲を誅って、饗応に誘い、そこで殺してしまうのである。それにしても、何とおかしな話であろうか。

敵だと思っていた神武天皇の誘いに簡単にのって、出かけて行き

殺されるとは、私達にすれば、一体何を云いたいのかと思う。土雲というものが、敵の戦略にすぐにのってくる程、程度の低いものだと云いたかったのだろうか。それとも、神武天皇の巧妙な作戦を賛賛しているのだろうか。

土雲というのは、「勇猛」というイメージが強い。多くの戦いを経て来ている筈の彼等の意外な脆さを感じはするが、それは別に神武軍の強さに緊ってこない。私達にしてみれば、神武天皇は卑怯だということを、まず初めに感じる。

しかし、よく考えてみれば、「天皇制確立」をねらって書かれた「古事記」の天皇が、卑怯などである筈はない。そこには、何か現代にはわからない戦略的なものでも含まれていたのではないかと、思う以外には、私には理解出来ない。唯、彼等が、「土雲」というものは、自分達より一段見下していたことだけは、確実である。

四

是に其の御子聞き知り驚きて、乃ち当芸志美美を殺さむと為たまひし時、神沼河耳命、其の兄神八井耳命に日しけらく、「那泥、汝命、兵を持ちて入りて、当芸志美美を殺したまへ。」とまをしき。故、兵を持ちて入りて殺さむとせし時、手足和那那岐弖、得殺したまはざりき。故爾に其の弟神沼河命、其の兄の持てる兵を乞ひ取りて、入りて当芸志美美を殺したまひき。故亦其の御名を称へて、建沼河耳命と謂ふ。

爾に神八井耳命、弟建沼河耳命に譲りて日しけらく、「吾は仇を殺すこと能はず。汝命既に仇を得殺したまひき。故、吾は兄なれども上と為るべからず、是を以ちて汝命上と為りて、天の下治らしめせ。僕は汝命を扶けて、忌人と為りて仕へ奉らむ。」とまをしき……。

神沼河耳命は、天の下治らしめしき。

兄と弟を比較して、弟を優ったものとしているのは、前の兄宇迦斯、弟宇迦斯と同様であるが、ここでは、「譲位」という問題が絡んでくるのである。

「古事記」では、天皇であることを、「有徳」と認めている。それは「序」の次の記述からも、明らかである。

伏して惟ふに、皇帝陛下、一を得て光宅し、三に通じて亭育したまふ。紫宸に御して徳は馬の蹄の極まる所に被び、玄扈に坐して化は船の頭の逮ぶ所を照らしたふ。日浮かびて暉を重ね、雲散りて烟に非ず。柯を連ね穂を并す瑞、史書すことを絶たず、烽を列ね訳を重ぬる貢、府空しき月無し。名は文命よりも高く、徳は天乙にも冠りたまへりと謂ひつ可し。

ところが、神八井耳命と建沼河耳命の場合は、有能な方が天皇になっている。天皇＝有徳であれば、天皇候補時代も当然有徳であると考えられるし、この場合の様に「有能」、「無能」を問題にすれば、有能に描かれると私達は信じる。

だが、実際は、彼は無能であり、自分から辞退しているのである。

このことから、二つのことが、考えられる。

㈠神八井耳命は、天皇の有力候補であって、まだ天皇でないから、あの様な女々しい男として、表現することが可能であった。

㈡「古事記」は、氏族に読まれることを、予想していたであろうから、有能な者こそ天皇になったということを示したかった。

しかし、下手をすれば、有能でさえあれば、臣下であってもなれる可能性を与えるものである。そこで、兄である神八井耳命が自ら弟である建沼河耳命に、譲ったことにし、「譲位」は、あくまで、皇室内部のことに限定している。

彼等は、「天皇」と「天皇候補者」との間に、明らかに、一線を引いている。つまり、神八井耳命が、もしこの時点で、天皇になっていれば、彼は卑怯ではあり得なかったのである。

現代的な考え方で云えば、「有能」でない者を、何故候補者にするのかと疑問を感じる。端的に云えば、「有能」と「有徳」が何故抱き合せになっていないかということである。勿論、「有徳」と「有能」の意味は、全く別のものである。

「有徳」とは、支配者として、当然持っているものであり「有能」とは、支配者になるべき資格である。私達であれば、「有能」な者が天皇になったら、自然に「有徳」であると考える。何故なら、支配者になるべき資格には、「徳」も含まれると思うからである。

従って、私達なら、天皇候補者にした以上、その者を「有能」と認め、「古事記」の様に天皇制の確立を目的とする様な書物に於いて、それを否定する様な部分は記さないだろう。

それなのに、彼等は、「天皇々々」と持ち上げておいて、自らの手でその矛盾した内容を平気で暴露しているのである。

現代人は、この様な部分を読めば、彼等の正直さに感動するだろう。しかし、私は実は、そうではないと思うのである。確かに、今日生きている人は、彼等を素朴で純情だと思うだろう。というのは、彼等は、私達の思考を超えた思想を持っているのだから。

だが、もっとよく考えてみると、結局、彼等と私達の間には、思考の流れの相違という決定的なものがあり、その為に、私達は彼等を理解出来ないのだ。

私達は、「流れ」というものを考える時、過去、現在という二つ

のものを自由自在に考えられる。換言すれば、過去から現在への流れも、現在から過去への流れも共に平面的なのである。そしてどちらかと云えば、過去から現在の方が、考え易い。だから、天皇候補時代という過去も、天皇という現在も、私達の頭の中には、何の支障もなく存在する。大体の場合、天皇候補時代から天皇へと「時」の流れ、それに付随して「有徳」、「有能」があるのである。

ところが、古代人の頭の中では、過去から現在、現在から過去へという平板な流れがないのである。彼等の中では、常に「現在」というのは、一段高い所に位置しており、そこから何もかも見ているのである。つまり、彼等にとって、最も大切なのは、「現在」なのである。従って、天皇という「有徳」者の過去は、それ程問題にしなかったのではないか。天皇であるということは、徳を備えた存在なのであるから、その過去は素晴しかったのだろう位の推測で、彼等は満足していたと私は考える。

こんな風に、過去との連絡がうまく行ってないからこそ、「有徳」や「有能」を、あの様に矛盾して使えたのだろう。

以上のことから、彼等を正直だなどと考えるのは、早計だと私は思う。彼等は意識して正直なのではなく、悪く云えば、「嘘をつくだけの思考力」がなかったのである。

又、それであたり前なのである。現代人と同様に、古代人も人間なのであるから。私達が虚構として、文学に認めた「嘘」を、彼等は白い行間に託しただけなのだろう。

五

是に七媛女、高佐士野に遊行べるに、伊須気余理比売其の中に在りき。……

乃ち天皇、其の媛女等を見したまひて、御心に伊須気余理比売の最前に立てるを知らして、歌を以ちて答曰へたまひけらく

かつがつも　いや先立てる　兄をし枕かむ

とこたえたまひき。……

故、其の嬢「仕へ奉らむ。」と白しき。是に其の伊須気余理比売命の家、狭井河の上に在りき。天皇、其の伊須気余理比売の許に幸行でまして、一宿御寝し坐しき。

後に其の伊須気余理比売、宮の内に参入し時、天皇御歌よみしたまひけらく、

葦原の　しけしき小屋に　菅畳　いや清敷きて　我が二人寝し

とよみたまひき。

作者は、ここで天皇を、一人の男として、表現している。敬語の部分さえ除けば、普通人としても、少しもおかしくない。天皇の歌と

して挙げられているのは、極めて素朴で朗らかなものであり、権力者を全く感じさせない。

だが、面白いのは、彼等はこの様な私達から見れば、庶民的である天皇像を通して、天皇の権威を認めさせようとしていることである。私達であれば、「権威」というものを、認めさせようとすれば、一般庶民とはかけ離れた存在として描くに決まっている。それなのに、彼等はその反対の存在として、表現している。現代人であれば、この文章から天皇の権威を読み取るのは、不可能である。

一体、その相違は何処から来るのであろうか。私は、「宗教」に原因があると思う。

古代人は、天皇を、「宗教的存在」として、天皇そのものを認めていた。だから、天皇個人に、偉大さを感じていたのである。換言すれば、「人間」としての天皇を、彼等は最初から認めていたのであるから、今さら「庶民的」だ、「人間らしい」等と感動することもなかったと思われる。

現代人は、どうであろう。私達は、国家という組織の中に、「天皇」というものを置いているが、決して個人を認めたりはしない。つまり、絶対に宗教的存在には、なれないのである。これは、何も天皇だけではなくて、誰でもそうなのである。

現代人は、「天皇」というのは、一種の機構と考えているから、そこには「人間らしさ」というのが、余り感じられない。従って、この様な歌を見ると、「人間らしい」とか「庶民的」だとか考えるのである。

古代というのは、支配者が野で遊んでいる乙女の姿を見ることに抵抗を感じない時代である。それ程、「庶民的」である筈の支配者が、人々の生殺与奪の権利を一手に握っていた不思議な時代なのである。

現代人にとって、「庶民的」なのが、古代人にとっては、「高貴」であり、現代人にとって、政治的な善は、古代人にとっては、悪なのであった。

では、現代人と古代人の思考は反対なのかと云われると、そうではないと云わざるを得ない。同じ様な面も、所々にあるのである。

私達は、そんなにも、現代と古代の相違を意識しなければ、いけないのだろうか。古典を読むにも、古代人の心を考えて読まねば、ならないのだろうか。

もし、文学というものを、作者と読者である自分との間の語らいと決めてしまうなら、その様な心配は、一切不要である。古代の作者の語りかけてくれるものを、自分なりに受け止めて、自分の考えを形成すればいいのである。誤っているかも知れないが、それが最も素直な読み方であるかも知れない。作者は、誤った解釈をしても

許してくれるだろう。

ところが、怖いのは、当時の読者なのである。作者が文学作品の中に、書いたことは、読者に異常な感じを以て受け止められることは、ないということである。（「古事記」を文学と決めつけてしまうのは、おかしいが、「古事記」の価値を何か一つに求めよと云われたら、文学に求めるのが一番妥当であると、私は思う。）

当時でも、批判する人も、共鳴する人もいたことは確かだが、少なくともその時代の思考では判断のつかない様なことを、作者は書かないのである。文学の成立する最も基本的な要素は、「人を感動させる」ということであり、これがなかったなら、文学は無価値に等しい。だから、作者は、自分の生きていた時代の人に感動してもらえる様な作品を書こうとした筈であるから、当時の読者を抜きにして、古典は解し得ないのである。

「古事記」の初めに、次の様な表現がある。

次に国稚く浮きし脂の如くして、久羅下那洲多陀用弊流時、葦芽の如く萠え騰る物に因りて成れる神の名は……

私達に、これが実感としてわかるだろうか。国土が未完成の有様を述べるのに、「水に浮んでいる脂のようで」あり、それが、「クラゲの様に漂っている」とは、一体どんなものなのか、私達には実感としてわからない。

又、葦の芽の様に萠え出る物に基づいて、化成した神とは、具体的には、どの様なことを、指すのであろうか。

作者が、この様な表現をしたというのは、当時の読者階級には、理解出来たというのに他ならない。

脂が水に溶けないで浮んでいる様は、想像出来る。クラゲが、水に漂っているのもわかる。どちらも定まりのない、流動的な感じを与える。問題は、それらがどうして、国土に関して使われたかということである。「国土」を例えるのに、「脂」と「クラゲ」が、何故出て来るのかわからない。

仮に、彼等がどういう気持で、それらを使ったのかわかっても、私達には本当に理解することは難しい。それは、語釈的なものになりがちであり、自分がいざ国土の未完成の様を述べる時には、その様な例えは、決して使わないことがわかっているからである。

六

現代文学を読んでわからない所があれば、読み返したり、又は、最後迄読むことによって理解出来ることが、度々ある。

その反面、古代文学は、わからない所は、永久にわからないことが多い。わからないというのは、勿論感情的にである。

特に「古事記」は、その傾向が強い。というのは、はっきりした政治目的を持っているからである。

「序」には、次の様に書いてある。

是に天皇詔りたまひけらく、「朕聞く、諸家の賫る帝紀及び本辞、既に正実に違ひ、多くの虚偽を加ふと。今の時に当りて、其の失を改めばずば、まだ幾年をも経ずして其の旨滅びなむとす。斯れ乃ち、邦家の経緯、王化の鴻基なり。故惟れ、帝紀を撰録し、旧辞を討覈して、偽りを削り実を定めて、後葉に流へむと欲ふ。」とのりたまひき。

「古事記」は、以上からも明らかな様に、限界がある。（文学として）

その為に、言葉そのものは、それ程難解でないにも拘らず、感情を捕えにくいのである。

神武東征にしても、神話から脱皮して完全な人間の文学にしようとする努力はわかるが、それも結局は、天皇を神の子孫とする為の工作なのである。

現代人には、この様な文学は書けない。政治思想を含んだものはあるが、大体に於いて、それは自発的に入れたものであり、上からの強制ではない。私達にしてみれば、上から抑えられて書いた様なものは、文学とは認めないが、彼等にとって、そんなことは、どうでもいいのである。例え、「邦家の経緯」、「王化の鴻基」の為の文学であっても、いいのである。

恐らく、彼等には、「文学」という概念はなかったのだろう。その位、所謂「文学」は一般化していたのだろう。

古代で、無理に「文学」というカテゴリーを作るならば、それは今日芸術という言葉で呼ばれるもの全部が、入ると思う。古代人には、私達の様に、文学などという言葉を使わなくても、生活そのものが、すでに文学なのであった。

字さえ知らずに現実的知識に乏しい彼等の方が、知識の豊富な私達より本当に大事なものを知っていたのではないかという気がする。私達は、彼等を一段見下して、まるで史料みたいに扱っていながら、彼等に「人間の心」を教えられているのである。

科学知識も、哲学的認識も、彼等の数倍いや数十倍も持っていながら、こんな基本的なことを、手取り、足取り教えられても、まだわからないのである。

私は、それは人間の世界が発展した結果として、人間の作り出したものに支配されがちということに関連していると考える。文学も又、そうである。

私達は、人間の作り出した社会に暮している。その社会は、私達の誰でも作家になれる機会を与えている。字を知らない人というの

は、最早存在しないし、又、仮りにいても、テレビや新聞という身近かなもので、いくらでも勉強出来る。
ところが、古代では、字の読める階級は、ほんの一握りであった。人々が、明日にでも作家になろうと思えばなれる社会とは、雲泥の差であった。従って、当時の作家は、大変な自負を持っていたと思う。
多分、彼等は、人々の為に自分が書くという気負いがあっただろうし、自分が書かなかったら誰が書くといった様な責任感も感じていただろう。古代の文学には、色々な欠点もあるが、私が感心したのは、彼等が人間というものをとても大切に表現しているということである。
読者の層が極めて狭かったから、そうなったのかどうかは知らないが、人間というものを一人〳〵理解しようとする姿勢が感じられる。当時の作家は、現代の人よりずっと読者の批評が怖かったと思う。
今の様に、次から〳〵出版されて忘れられて行くのとは違って、いつまでも読者の批評と共に残っただろう。従って、彼等は、「国民文学」的なものを、目指したのだと考える。今の作家より、スケールが大きかったのだろう。
今の世の中は、小説の材料になる様なことが、多過ぎることも事実である。そしてそれは、何も人間とは限らないのである。人間以外にも、書くことは山の様にあるのであって、古代の書くことの限られた時代とは違っている。
古代に事件が、なかったというのではない。唯、彼等の見聞が狭かったので、材料とは、なり得なかったのである。
世の中が発展した必然の結果とは云え、古代人との間にこれ程の断絶が出来たのを、私は悲しんでいる。私にとって、古代人は、或る時は、外国人よりもずっと遠い存在である。
特に、私の様な第二次大戦後の教育を受けた世代は、古代といっても素直に受入れることが出来ないのである。
元来、古代――特に記紀の時代は、単に遠い時代でなければならなかった筈だ。それが明治政府によって、勝手に美化され、私達は、古代研究の過程で最大の誤りを犯してしまったのである。昭和初期の軍国主義の時代に、頂点に達したが、終戦と共に幕を閉じた。すると、今度は、極端な否定に変り、私達は又も、誤りを犯した。
記紀は、明治以後、正当な地位を与えられたことは、一度もない。
私の世代の者が、研究するには、二つの山を通らないと、古代に辿り着けないのである。両極端の肯定と否定に、正しい見解を与えつつ読んで行かないと価値を見失なってしまう。

私も、「古事記」を読んでいって、全面的に否定するか、肯定するか、のどちらかをしなければならない様な気になって、否定した。そして、誤りに気づいて、直そうとした時には、否定した時の倍以上の労力を要した。

本当に研究した上での肯否なら仕方ないが、私の様に、少し読んだだけで否定してしまうのは、一方的過ぎる。

文学を、肯否で割り切るということ自体おかしいのであり、感動したり、反発したりしてこそ、真の読者であると思う。

記紀は、これからもまだ政治に利用されないとは、云い切れない。だが、今度、おかしな利用のされ方をしたら、二度と浮かび上ることはないだろう。

私達は、古典文学の一つとして、その価値を認め、正当な地位を与えるべきである。歴史的なものも入っているが、文学とした方が、古代人の考えにも近いし、危険もないと信ずる。

記紀を否定するのは、易しいが、それを書いた古代人の心まで、否定することは出来ない。

太安万侶は、「古事記」の「序」で次の様に云っている。

然れども、上古の時、言意並びに朴にして、文を敷き句を構ふること、字に於きて即ち難し。已に訓に因りて述べたるは、詞心に逮ばず、全く音を以ちて連ねたるは、事の趣更に長し。是を以ちて今、或は一句の中に、音訓を交へ用ゐ、或は一事の内に、全く訓を以ちて録しぬ。即ち、辞理の見え叵きは、注を以ちて明らかにし、意況の解り易きは、更に注せず。……

彼は、「古事記」を書く時点に於いて、当時の古典である「旧辞」と「先紀」を、読む苦労を述べている。彼の時代でさえ、すでに断絶というものが、現われているのである。

しかし、彼は負けずに一生懸命やったということを云っている。私は、彼は決してこれらの古典を正しく解していたとは思わない。唯、自分なりのちゃんとした解釈を持つに至ったのだろう。この様に、自分の努力を堂々と述べている所に、彼の自信が伺える。

古代との断絶を埋めるのは、不可能であるが、いくらかでもましにするものは、現代人の人間愛であると思う。古代人は、この世にいないのであるから、彼等から愛を求めるのは、無理である。

そうだとしたら、私達現代人が見えざる相手である古代人に、愛を送る以外に方法はないのである。彼等の反応を読み取ることが出来ないだけに、それは一方的な賭けみたいになってしまうが、少しでも自分の古代観の確立の為に役立つと、私は信じている。